

海外研修レポート  
(2017/04/03-05)

2017.04.15

4 年目獣医師 田畑達彦

この度、加藤院長と共に 4 日間の American Animal Hospital Association(AAHA) Conference への参加に加え、Colorado State University(CSU)を訪れる機会を頂き、CSU では Veterinary Teaching Hospital(VTH)にて 3 日間にわたる面談・見学を行った。この 3 日の間に、一般の獣医師では会う事すら叶わないであろう多くの獣医学の権威達と話をし、常に世界のトップレベルを走る CSU VTH の提供する獣医療を目の当たりにした。また、デンバーでは Planned Pethood Plus(PPP)という一般開業医の動物病院や Dumb Friends League(DFL)というシェルターを見学する機会も頂いた。今回、得ることができた経験を共有するために比較を交えつつ私見を述べる。

まず、テネシー州ナッシュビルでは AAHA Conference に参加した。AAHA Conference はアメリカで開催される 3 大 conference の一つであり、各セミナーの内容が比較的基礎的であることや病院の経営・管理に関するセミナーも多く開催されることが特徴である。また、より先駆的あるいはより詳細なセミナーについては、早朝に sunrise session あるいは夜に sunset session という形で、食事をしながら聴講することも可能である。上述の特徴だけでも日本の学会、セミナーと大きく異なるが、日本の大規模な学会と比較して、私が最も驚いたことは講演者と聴講者のモチベーションの高さである。日本における学会やセミナーはたとえ少人数であっても、講演者がまず話し、それを聴講者が静かに聞き、最後に多少の質疑応答を行って終わり、という形式が多い。この時、臨床に即さない細かすぎる話が展開されることもしばしばである。一方、AAHA conference の各セミナーは、聴講者はいずれも約 80-100 人規模であるが、いずれのセミナーにおいても講演者サイドは、細を穿ち過ぎることなく重要な点を意識して話を組み立てており、講演中であろうと聴講者と積極的なディスカッションを行うという形式をとっていた。また、聴講者サイドも講演者同様に積極性にあふれており、講演の途中でも疑問点や不明点は都度質問を行い、それに対する回答も他の聴講者全員で共有していた。さらに、これらのことを若手の獣医師のみならず、一見してベテランに見える獣医師でも行っていたことが一層、印象的であった。結果として、セミナーが終わった後には講演者、聴講者の別なく、当該テーマに対してより理解が深まるという仕組みである。こうした、お互いにとって成長の機会となるよう年齢に関係なく、積極的にディスカッションを行う姿勢は日本においても模倣されるべき手本であるように感じられた。

次に、コロラド州フォートコリンズの CSU VTH を訪れた。CSU VTH は獣医療の質において、毎年、世界で 3 本の指に数えられる教育病院であり、スタッフ数は約 4000 人にも上る。エマージェンシーや外科、循環器科など各科にはそれぞれ 3-5 人の教授を擁しており、resident、動物看護師、学生など含めると 1 診療科あたりおよそ 20-40 人のスタッフが日夜、専門的な診療・研究を行っている、また、CSU VTH はメディカルセンターやがんセンターなどの施設のみならず、馬の CT および ope 専用施設や Argus Institute という愛犬、愛猫を失ったペットロスを抱えるオーナーをケアする施設を

も擁している。さらに驚くべきことに、これらの施設のほとんどは加藤院長を始めとする、多くの有志、賛同者によるドネーションによって設立・運営されている。これらの点が日本の獣医大学と異なることはいわずもがなである。

今回、CSU VTH では加藤院長よりエマージェンシーの権威である Dr.Hackett や循環器の Dr.Orton を紹介していただき、彼らのユニットを中心として病院全体を見学させて頂いた。初日には Dr.Hackett 直々に VTH を案内して下さり、その後、お話を伺う機会を得た。Dr.Hackett 曰く、『日本とアメリカでは飼養犬種の分布や飼育環境などの背景が異なる。アメリカにおいては圧倒的に大型犬が多いため、エマージェンシーとして多い疾患は腫瘍に由来する腹腔内出血、異物誤食または中毒、あるいは胃拡張胃捻転症候群が多い』とのことであった。事実、3日間を通してエマージェンシーユニットに入院していた多くの犬は大型犬であり、その多くは腫瘍に由来する心タンポナーデや血胸、血腹であった。また、CSH VTH はとりわけ腫瘍治療分野が有名であり、独立したユニットであるがんセンターではエマージェンシーを脱した腫瘍性疾患罹患犬の治療が行われていた。がんセンターは約 25 人もの教授、約 10 名の resident を擁しており、彼らが診察する症例数は年間約 6000 件にも上ると言うが、日本における症例数とは比べようもない。

他方、循環器科で多い症例は動脈弓遺残を始めとする先天性心奇形や拡張型心筋症であり、大型犬の飼養頭数が多いことや、いわゆるペットショップでなくシェルターからの保護犬が多いという環境的な背景も感じられた。アメリカにおいては、日本と比して小型犬自体の飼養割合は少ないが、やはり僧帽弁閉鎖不全症の犬は多く、その治療の一環として人口僧帽弁置換術なども検討されていた。余談ではあるが、人工弁に関しては Dr.Orton 自ら改良を加え、オープンにしないとの条件のもと最新版を拝見する機会も得た。

今まで述べてきた事柄から、CSU VTH においてはとにかく先進的な検査や治療ばかり行われている印象を受けるかもしれない。しかし、実際はエマージェンシーや外科においても、各疾患に対し、それぞれ成書に記載されているような基本に忠実な治療や処置を行っており、現在までの獣医学でカバーしきれない特殊な部分、症例に対してのみ先駆的な治療・処置が試みられていた。その証拠に、今回見学した多くの症例に対する治療・処置は当院でも同様に行っているものばかりであった。異なる点があるとすれば、それは症例数である。また、その、膨大な症例を効率よく処置できるよう、麻酔を担当する Anesthesia や入院管理を行う Critical Care Unit などのチームが形成されていた。各診療科に加えて、これらのチームが効率的に連携・協力できる信頼関係が膨大な症例をさばく原動力となり、結果的にその膨大な症例数が各チームに属する個々人の質を高めるという好循環を生み出しているように感じられた。日本において、同様の症例数を確保することは困難であるが、獣医師含めスタッフ教育を行い、積極的に研鑽していく姿勢を保っていこうという姿勢は見習うことが出来ると感じられた。